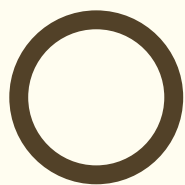


in search of
the lost doughnut hole

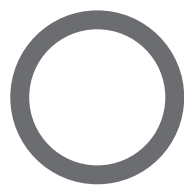


芝垣亮介・奥田太郎 編
Ryosuke Shibagaki Taro Okuda

失われた ドーナツの 穴を求めて

穴があったら入りたい!?
学問、人生、宇宙の謎

すべての穴は
ドーナツに通ず



芝垣亮介・奥田太郎 編

失われた
ドーナツの
穴を求めて

目次

はじめに	5
<hr/>	
「ドーナツの穴」の研究	
<hr/>	
● 第0穴	
ドーナツとその穴にまつわる深い謎を学問する ～ドーナトロジーへようこそ	奥田太郎 8
● 第1穴 [歴史学]	
ドーナツの穴はいつからあるのか	大澤広晃 26
● 第2穴 [実証研究]	
失われたドーナツの穴を求めて	芝垣亮介[松川寛紀 監修] 46
● 第3穴 [経済学]	
ドーナツの穴はいくらで売れるのか	後藤剛史 68
● 第4穴 [物質文化論]	
ドーナツの穴から世界の成り立ちを覗く	佐藤啓介 90
● 第5穴 [コミュニケーション学]	
ドーナツの穴に向かって会話する	今井達也 108
● 第6穴 [数学]	
ドーナツの穴は数学的に定義できるか	佐々木克巳 126
● 第7穴 [言語学]	
私たちは何を「ドーナツの穴」と呼ぶのか	芝垣亮介 152
● 第8穴 [哲学]	
ドーナツに穴は存在するのか	奥田太郎 192
「ドーナツの穴」を学ぶ人のための必読書	208
● 特別寄稿	
本書の穴を埋める	加地大介 214
あとがき	219

ドーナツと穴をめぐるコラム

● 穴コラム0	
ドーナツの形は宇宙の形?	奥田太郎 20
● 穴コラム1	
中国から考えるドーナツの穴① — 武漢面窩と中国の「近代」	宮原佳昭 40
● 穴コラム2-1	
僕たちがドーナツ屋になったワケ	松川寛紀 58
● 穴コラム2-2	
ハグジー流・家庭でできるおいしいドーナツのレシピ	松川寛紀・松川由実 64
● 穴コラム3	
穴馬考 — あなたの、そして私の穴が走っています	高田一樹 84
● 穴コラム4	
天体観測ミッションとドーナツ	坂本 登 104
● 穴コラム5	
中国から考えるドーナツの穴② — 漢字・文物・貨幣	宮原佳昭 120
● 穴コラム6	
不思議の国のアリスにみる穴だけ残ったドーナツ!	佐々木克巳 150
● 穴コラム7-1	
穴を掘るって、地面を掘るんじゃないの?	芝垣亮介 180
● 穴コラム7-2	
穴を埋めると穴はなくなってしまうのか?	芝垣亮介 184
ドーナツの穴制作委員会 メンバー紹介	222

Sample

はじめに

私は言語学者だ。私がドーナツの穴を研究することになった直接のきっかけは、「ドーナツ」と「ドーナッツ」の違いであった。ある時、ミスタードーナツの店員が「ドーナッツ」と言ったのを聞き、その不一致を面白く感じたのだ。ホチキスとホッチキスのように、その「ッ」の有無も東日本と西日本の方言差なのだろうと勝手に見当をつけ、私は何気なくインターネットで「ドーナツ、ドーナツの違い」と検索した。すると出てきたのは予想だにしないものであった。おびただしい数の「ドーナツの穴」についての項目が現れたのだ。そこにはドーナツの穴に関するまとめサイトまであった。何のことかもわからず、ただ検索結果に目を通していただけだが、結局どの記述にも腑に落ちない感覚が残った。

ちょうど同じ頃のある朝、それもまだショーケースにドーナツが出揃っていない7時台だったのだろうか。私はたまたま近所のミスドでオールドファッションを買おうとしていた。レジの前では年齢80とおぼしきおじいさんが、ショーケースに並んだドーナツを眺めていた。おじいさんはその幾分しぼんだ顔をもちあげると店員にこう切り出した。

「あのドーナッツはまだないのか？」

20歳くらいに見える女性の店員が「どんなドーナッツですか？」と尋ねると、おじいさんはこう言った。

「穴が空いているドーナッツ！」

私は軽い混乱をおぼえた。ドーナツってほとんど穴があいているし…。戸

惑う私をよそに、店員はおじいさんに対して「どんな穴の空いたドーナツですか？」と聞き返した。私はいよいよ心中穏やかでなかった。どんな穴って、全部同じ穴やん…。そんなやりとりが2、3も続かないうちにおじいさんは、「理解力がない！」と店員に言い放ち、何も買わずに店を後にした。そう、ドーナツの穴ひとつ買えず。

この一件は、なぜか、私の心にぼっかりと穴をあけた。先行研究をあさり、『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』（大阪大学ショセキカプロジェクト編、大阪大学出版会、2014年）と題された本をみつけ貪り読んだが、この本もまた、私の心の穴を埋めてくれはしなかった。そして、思ったのだ。ドーナツのことも穴のことも、誰もまともに考えていない。これは誰かがまとまったことを言わなくちゃいけない、と。

2015年4月26日、私は、かねてより交流のあった哲学者の奥田太郎さんに声をかけ、ドーナツとドーナツの穴を本気で学問的に探求するための有志の共同研究チーム、名づけて「ドーナツの穴制作委員会」を立ち上げた。行き当たりばったりで共同研究を進めるのではなく、探求の試み全体のコンセプトと方向性を示す役割（プロデューサー）を奥田さんが務め、探求の試みを具体的に形にしていく役割（ディレクター）を私が務めることで、共同研究作業に一定の方向性とまとまりを保持しながら厚みと広がりをもたせることを目指したのである。エンターテインメント作品の場合は、その下にクリエイターたちが連なるわけだが、私たちの仕事は学術的研究なので、リサーチフェロー（研究員）の面々が活躍している。

本書はその「ドーナツの穴制作委員会」のメンバーが執筆する第一の成果物である。このチームは、歴史学、経済学、物質文化論、コミュニケーション学、数学、言語学、哲学、経営倫理学、工学を専門とする研究者から構成されており、本書には、そのメンバーがそれぞれの専門分野からドーナツの

穴を分析した論文8本、および、ドーナツや穴にまつわる興味深い知的発見をまとめたコラム10本が収録されている。どの文章も、私と奥田さんと各執筆者が熱い議論を交わし、納得がいくまで練り上げた代物である。

さて、本書をお読みいただければすぐにわかると思うが、実際のところ、ドーナツの穴というやつは本当に不思議で興味深い。果たしてドーナツの真ん中には穴があるのか、それとも何もないのか。そもそも、穴があることと何もないことは違うのか。たとえば、「ドーナツには穴が1つあるが鼻には穴が2つある」というように、私たちは穴を「もの」のように1つ2つと数えてそこにあることを確認できるが、そこに「もの（たとえばドーナツの生地）」がないことが穴という存在の根本のようにも思える。では、私たちはないものを数えているのだろうか。

ここで本を閉じようとしたあなた、そんなことを考えても意味がないとか言わないでほしい。そもそも、考えたり研究したりというのは、必ずしも意味があるからするわけではないのだ。だって、あなたは知りたくないだろうか。人はなぜ感動し、恋し、また悲しむのか。なぜ生を受け、死にゆくのか。あるいは、イルカの言葉にも方言やなまりがあるのか。1000年後の地球がどうなっているのか。そして、ドーナツの真ん中には何があるのか。私はすごく知りたい！ それらを知ることは、生きていく上で（たぶん）そんなに意味はないだろうし、あまり役にも立たないだろう。ただそれでもはっきりと言えるのは、知ることそれ自体は、とても大きな喜びであり幸せであるということだ。

そう、今そこにある謎を、今そこにある「知りたい！」を探求する、その喜びと幸せを共有することが、本書の一番の目的である。

ドーナツの穴制作委員会ディレクター 芝垣亮介

第0穴

ドーナツと その穴にまつわる 深い謎を学問する ～ドーナツロジーへようこそ

奥田太郎

profile

東京都で生まれるが、6歳の頃に奈良県に移り住み、以来、アイデンティティは奈良にある。物心つく頃から絵を描くのが大好きで、手塚治虫と出会ってからは、『火の鳥』のような深遠で壮大な作品を生み出す漫画家になりたかった。中学生の頃、軟式テニス部の部長や生徒会長など、長のつく役職を歴任して自分のなかにある特定の資質を自覚することになるが、それを伸ばそうとはまったく思わず、高校進学とともに「文芸部」という名の漫研を創設、趣味に生きる人生を夢見る。浪人時代に出会った某予備校講師に感化され、大学進学と同時に学問の道も志す。漫画作品の肥やしとすべく、最も射程が広くて深い学問、哲学を学ぼうと思っていた。(192頁に続く)



ある日の午後、あなたの右手にあるドーナツが、突然当たり前のものではなくなる…。そう、この本を読んだ後では、そんな瞬間が訪れるかもしれない。なぜなら、この本がこれから読者のみなさんにお届けするのは、人類が世界をより魅力的に捉えるために蓄積してきた学術的な思考、それをドーナツとその穴へと傾注した前代未聞の知的光景だからである。そうした光景をいっそう見通し良く味わっていただくために、少しばかり頭の準備体操にお付き合いいただこう。

1 私たちはドーナツのことを どれだけ知っていると言えるだろうか

物事を見つめる古典的な方法として、分析と総合がある。この世の物事の

多くは私たちにはとても複雑に見えるので、何の工夫もなくぼんやりと眺めていただけではその真相を捉えることはできないだろう。しかし、為す術はある。一見複雑そうなものを理解しようとするときには、対象となる複雑そうな物事をなるべく単純な部分に分けて捉えるとよい。いわば、複雑そうに見える目の前の物事は、本当は単純な部分の組み合わせでできているのだろう、という仮説を立てて、そうした単純な部分を探していくというやり方である。これが「分析」と呼ばれる方法である。

たとえば、時計全体をぼんやり見つめていても時計のメカニズムについては何もわからないが、時計内部がどのような部品によって構成されていて、それぞれの部品がどのような働きをしているかを見ていけば、時計の中で何が起きているのかを理解することができるだろう。もちろん、部品の働きだけを見つめていても時計のメカニズムがわかったことにはならない。次に知らなければならないのは、部品と部品の間がどのように影響し合っているのか、それが時計全体の中でどのような役割を果たしているのかである。このように、一度部品に分けた後、それらの部品がどのように全体を構成しているのかを探っていくことで、ようやく時計のメカニズムを十分に理解することができるようになる。一度分けた部分を全体へと組み直していくこの探求方法は、「総合」と呼ばれている。

私たちが何か物事を捉えるときには、こうした分析と総合の方法がとても役に立つ。それはドーナツについて考えるときも同じである。ここで、「え？ いや、ドーナツって、全然複雑じゃないし…」と、そんなふうに思った人もいるかもしれない。しかし、その結論を下すにはまだ早すぎる。一見して単純に思えるものが実は複雑で奥が深いということは、この世界に数え切れないほどたくさんある。たとえば、有名なニュートンのリンゴの逸話を思い出してみてもいい。庭に植わった木から果実がポトリと地面に落ちる。実に単純でありふれた光景だ。手元から物が転げて地面に落ちることなんて、日常茶飯事だろう。あまりにも当たり前すぎて、古代ギリシアの世界では、重力を司る神様を誰も想像できなかった、という話もあるくらいだ。しかし、ニュートンは、その光景を目にして「なぜ物は落ちるのか」という問いを立て、ま



た、「なぜリングは落ちるのに月は落ちてこないのか」とも考えて、この世界の物体はすべて互いに引き合う力をもっているということ、つまり、万有引力を発見したのである。この発見は、私たちの宇宙に関する理解の仕方を大きく変え、その後の物理学の飛躍的な発展をもたらすことになった。実は厳密に言えば、この逸話は実話ではない。しかし、作り話としても、リングが木から落ちるといって一見して単純に思える現象が、全宇宙を支配する複雑で奥の深い物理法則を体現している、ということは本当のことであり、とっても魅力的なエピソードだと言えるだろう。

もちろん、本当に単純でしかないものをわざわざ複雑に考えるのは筋が悪い。しかし、目の前のものが本当に単純かどうかは、調べてみなくてはわからない。ドーナツがまったく複雑でも何でもないものなのかどうかを知るには、一度調べてみる必要があるということだ。ただし、調べてみた結果、何も発見はなく探求が徒労に終わることもあるだろう。だから、こういうときには、「これは探求してみる価値があるんじゃないだろうか」という直感ひらめと閃きがある程度必要になってくる。こうした直感と閃きは、学者と呼ばれる人たちに求められるセンスそのものだ。では、みなさんは今、ドーナツにその直感と閃きを抱かないだろうか。

あなたの手元にドーナツがあるなら、そのドーナツをじっくり見つめてみてほしい。あなたはいくつの視点でそのドーナツを分析できるだろうか。それによってドーナツはどのような要素へと分析されるのだろうか。たとえば、用途という観点から分析すれば、ドーナツは美味しい食べ物として捉えられ、その成分、製法、仕上り方、食べられ方など、知りたいことに応じて適切な分析と総合を施されることになる。それが市場に流通して、という場面まで広げるなら、ドーナツはどれくらいの甘さにして、どれくらいの価格で売るのが適切なのか、といったことも気になってくる。あるいは、形という観点から分析すれば、食べ物としてのドーナツだけでなく、ドーナツ型のクッションとか、ドーナツ型のレコード盤（あるいはCD盤）などをも含めて考えることになる。どれもある観点から見ると、同じ形をしていると理解できるからである。はたまた、穴という観点から分析するなら、自分の鼻の穴、履いて

いる靴下の穴をはじめ、世界中のありとあらゆる穴とドーナツの穴を比較検討して、その共通点と違いを探求することにもなる。

手元のドーナツをもとに、少し学術的な思考を働かせただけでも、様々な問題が立ち上がってくる。どの観点から分析しても、それはまさにドーナツについての探求に他ならない。ドーナツには、まだまだ探求されていない謎が数多く存在している、ということだ。いったい、私たちはドーナツのことをどれだけ知っていると言えるのだろうか。私たちが普段何気なく口に運んでいるドーナツは、実は、ものすごく謎に満ちた物体なのかもしれない。いや、そもそもドーナツなるものが物体であるのかどうか、とりわけ、ドーナツの穴は物体なのかということも、気になり出せば知りたくて仕方がなくなってくる。ドーナツとその穴のことをきちんとわかっている、と言えるためには、様々な観点から明らかになったドーナツに関する知見を総合して捉える必要がある。さあ、ここまで問題意識を共有できたならば、話は早い。ドーナツとその穴の謎を、私たちと一緒に解明する心の準備は十分整ってきたと言っておいてよいだろう。

2 ドーナツとその穴の謎を解く方法

さて、ドーナツとその穴の謎を解く気分が高まったところで、自分流にあれこれとドーナツについて考えようとする人もいるだろう。そうした思考の時間はとても大切で、ぜひ多くの人に一度取り組んでもらいたい、と言いたいところだが、やみくもにドーナツについて考えることは、意義深いことではあるが、目的地に対してかなりの遠回りをしていることにもなる。

先ほどの時計の例を思い出してほしい。時計のメカニズムを知るためには、個々の部品へのバラシ（＝分析）と時計への組み立て（＝総合）が必要だと述べた。では、部品にバラしたり部品を組み立てたりするときに、私たちは何ももたずに素手で取り組むだろうか。通常、私たちは、ドライバーやペンセット、ルーペなど、様々な道具を使って作業をするだろう。同じように、分析したり総合したりして考えるときにも、道具があった方がうまくやれるはず

だ。そうした考えるための道具となるのが、「理論」である。考えることは誰にでもできるが、それをうまくやるためには「理論」の助けを必要とする。では、その「理論」はいったいどこで入手できるのだろうか。

あなたは一人でそこに生きて考えているわけではない。あなたの周りには、そして、あなたが生まれるずっと前から、いろんなことを様々な仕方でも考えてきた知的活動の先輩が数え切れないほど存在している。一人では思いつかなかったような解決法を複数で協力して導き出した人たちもいれば、天才的な閃きによって、それまで誰も思い浮かべなかった発想を打ち出した人たちもいる。長い人類の歴史のなかで、そうした様々な知的活動が積み重なり、考える方法や内容もさらに洗練されてきた。いわゆる学問とは、そうした知的活動の結晶だと言ってよい。学問の歴史は長く、その厚みは膨大で、あなたが考えようとしていることの大半は、そのなかに何らかのヒントをみいだせるものかもしれない。あなたが大問題だと思って苦悩している問いには、すでに答えが出ているものもあるかもしれない。そうだとすれば、先輩たちが残してくれた遺産を私たちが使わない手はない。そう、きっとドーナツとその穴の謎を解くときにだって、様々な学問の力が役に立つはずだ。実際この本でも、そうした様々な学問の力を借りてドーナツとその穴の謎に取り組んでいる。この謎を解く方法は、様々な領域にわたる学問のなかにみつけることができるのだ。

とはいえ、学問と言えば、物理学や生物学、化学など、きちんとした教科書があって、学校や大学の授業で学べるような体系化され確立されたものを思い浮かべる人もたくさんいるだろう。そうしたイメージで学問を捉えている人にとっては、ドーナツとその穴の謎などというテーマに対して学問的に取り組むなどということは、外連味たっぷりのお遊びに見えてしまうかもしれない。実際、本書の試みについて他の研究者に話したときに、冷ややかな反応をされたこともあった。だがその一方で、大いに面白がり、本書の試みに賛同してくれた人が少なからずいたのもまた事実である（だから本書はみなさんのお手元にあるわけだ）。おそらくこの背後には、学問というものをどのようなものとして捉えるかという学問観の違いがあるのだ。

ここで、学問なるものについて少し考えてみたい。現代の私たちが典型的なものとして思い浮かべる学問は、物理学や生物学、化学、天文学などの自然科学であったり、経済学、経営学、法学などの社会科学であったりするだろう。あるいは、数学や統計学、心理学、社会学、言語学、歴史学なども含まれるだろう。しかし、こうした細かく分野ごとに分かれた「○○学」が成立し始めたのは、せいぜい200年前、19世紀のヨーロッパにおいて、社会の世俗化と産業革命後の技術的発展に応じてそれまでの学問を再編するなかで、科学が制度化されて以降のことにすぎない。また、この時期に、「科学者」と呼ばれる専門職業人が生み出され、専門雑誌をもつ専門学会組織が本格的に制度化され、現代の私たちがイメージする学問像が生まれたのである。

それ以前は、12世紀以降キリスト教文化を基盤とする中世ヨーロッパにおいて生まれた大学が営んできた学問、すなわち、神学、医学、法学という社会的にニーズのあるもの、それに加えて、聖書と自然という神の書いたふたつの「書物」を人間が読み解くための「自由七科」（文法学、修辞学、論理学の三科、および、代数学、幾何学、天文学、音楽の四科）だけが制度的な学問だったのであり、それ以外のもの、たとえば、後に工学と呼ばれることになる営みは、職人技の領域としてまだ制度的な学問の外側にあったし、後に化学と呼ばれることになる営みなどは、まだ怪しげな魔術のようなものであった。これは、12世紀において、イスラム圏から古代ギリシア・ラテンの古典が流入したことでキリスト教の教義内容との整合性を厳しく求められるという知的要請に促されて生まれた、当時の事情が色濃く反映された状況だと言えるだろう。そのため、神学的要素が強いわけである。

さらに時間を遡れば、古代ギリシア・ラテンの時代において、すべての知的営みは「哲学」の名の下にあった。たとえば、有名な哲学者のアリストテレスは、現在では物理学や生物学といった自然科学の領域に属するようなテーマについて数々の探究成果を残しているが、そうした知的営みは「自然哲学」として整理されるものであった。平たく言えば、学問をする者は皆、知 (sopia) を愛する (philein) 者=哲学者 (philosopher) だったのである。

哲学者が学問の中心的な担い手である時代は、実は、先ほど述べた19世紀



における科学の制度化に至るまで長らく続いた。たとえば、「我^{われ}思^{おも}う故^{ゆえ}に我あり」という言葉で有名な哲学者デカルトは、現代で言う自然科学や数学についても数々の研究成果を残しているし、また、モノドロジー（単子論）で有名な哲学者ライプニッツもまた、微積分についてきわめて重要な仕事を後世に残している。さらに、コペルニクス、ガリレオ、ケプラーといった天文学の大物、そして、ニュートンのような物理学者もまた、自然哲学者としてそれぞれの仕事に取り組んでいたのである。おそらく19世紀までの学問に携^{たずさ}わる人びと（哲学者たち）は、専門職業人というよりむしろ好事家と呼ぶにふさわしい。もちろん、宗教的な力の強い時期においては神学を支える役割を果たしていた哲学が、世俗化の進展とともに今度は科学を支える役割を果たすことになるなど、紆余曲折はあったのだが、それらはすべて哲学の営みのなかで起こっていたのである。

19世紀における科学の制度化により、学問は、その業績評価の基準や方法が標準化され、高度に専門分化していくことで、驚くほどに大きな成果を次々とあげていくことになる。世界はそれによってある意味では劇的に豊かになった。しかし他方でその流れは、毒ガス兵器や核爆弾といった負の産物をもたらし人びとに甚大な被害をもたらすところにもまで行き着くことにもなったのである。こうした正負をあわせもつ諸々の帰結は、好事家から専門職業人への移行、つまり、哲学者から科学者への移行によってもたらされた部分も少なからずあるのかもしれない。

好事家と専門職業人の最も大きな違いは、自らの営みが置かれた大きな文脈に対して自覚的である必要があるかどうかである。専門職業人としての科学者は、既成の知識の伝達を中心とする学問的な訓練を受けて育ち、制度的に敷かれたレールの上で仕事をしていれば着実に成果が出ることを学ぶ。そうした環境のなかでは、自分の走っているレールの隣に何があるのか、通り過ぎてきたものが何だったのかを省みる必要はまったくない。少し極端な話になってしまうが、そうした学問を学問だと考えている人にとっては、ドーナツとその穴の謎など、学問の対象だとはまったく思えないというわけだ。

しかし、ここまでごく簡単に示してきたように、そうした学問観が成立し

たのは、ここ200年ほどの間のことであり、もっと長い時間のなかで見れば、学問はもっと懐^{ふところ}の深いものとして、様々に姿を変えてきたのである。したがって、学問とは、こうした一定の時間の幅をもって展開されてきた人類の知的営み全体を指すものである、と考えることもできるはずだ。そのように考えたなら、ドーナツとその穴の謎が、いたって真面目な第一級の学問の探究対象であってもおかしくはないのである。

さて、それでは、ドーナツとその穴の謎に対してどのように学問的に挑戦することができるのだろうか。こうした前代未聞の探究テーマにアプローチするとき、まったく足場のない状態から素手で考え始めても、ぐるぐると堂々巡^{めぐ}りに終わるのが関の山である。新しいテーマに取り組むときには、まずは、すでにある確立された学問の方法（先ほど述べた科学の方法も含む）を仮設的な足場として用いていくのが最も着実な道だと言ってよい。本書での探究が足がかりとしたのは、歴史学、経済学、物質文化論、コミュニケーション学、数学、言語学、哲学の知見と方法である。これらのうち、どの学問領域も、これまでの歴史のなかでドーナツとその穴の謎に取り組んだことなどなかっただろう。したがって、ここからの本書の歩みは、ひとまずの足場を頼りに手探りで進む前人未到の冒険の道のりを行くものとなる。

私たちが頼りにする足場は、今見たように、様々な学問領域の知見や方法であるので、形も角度もまちまちである。具体的に言えば、それぞれの学問領域ごとに、議論を記述する仕方について独自のルールがある。論より証拠で、本書をパラパラとめくればすぐに、記述法のばらつきをみつけることができるだろう。本書では、そうした学界での標準をなるべく残してあるが、それは、そのやり方でしか表現できない厳密さというものがあるからである。学術的に物事を探究していくことは、様々なことを私たちにわからせてくれるが、それは裏を返せば、何がまだわからないかをはっきりさせることでもある。そうしたわきまを長い時間をかけて結晶化させてきたのが、そうした記述のルールであったりする。そういうわけなので、ぜひ本書での雑多なスタイルの共存を、学問をする味わいとしてたっぷりお楽しみいただきたい。

また、本書は、歴史学で始まり哲学で終わる、という構成になっている。



実はこれには理由がある。どんな学問領域にも歴史があり、「学説史」という名で探求されている。学説史は、ひとつに固定されたものではなく、常に書き換えられ続けていくものである。すでに見てきたように、学問全体にも歴史があるので、当然ながら、哲学にだって歴史があるし、もっと言えば、哲学の歴史にだって歴史があるのだ。他方で、哲学もまた、どんな学問領域についても成り立つ営みである。たとえば、物理学には物理学そのものありようを問う物理学の哲学があり、生物学には同じように生物学の哲学がある。もちろん、歴史学にも歴史学の哲学がある。実際のところ、本物の科学者は同時にその科学の領域に関する哲学者であることが多いのだ。このように、人間がこの世のありとあらゆる物事について学問的な営みをする限り、歴史と哲学をその営みから消去することはできない。ドーナツとその穴の謎を解く試みについてもまた然りだ。いわば、歴史学と哲学は学問のアルファとオメガである。だから本書は、歴史学の論考で始まり、哲学の論考で終わっているのだ。

さて、これでドーナツとドーナツの穴をめぐる知的冒険の旅に出かける準備は完全に整った。冒険への旅立ちを祝して、私たちが本書でこれからすることになる体験に対して、名前をつけておきたい。謎に満ちたドーナツを学術的に探求する領域を名付けて、「ドーナツの学」、すなわち、ドーナツロジー (doughnutology)¹ と言うのはどうだろうか。

ドーナツとその穴について誰もが考えることをやめてしまった（そもそも考え始めてすらいない？）「失われた」現状を思えば、本書は、おそらくは世界初のドーナツに関する学際的研究（ドーナツロジー）の書である。読者のみなさんは、この本を通じて、いわば新しい学問が誕生する場に立ち会う証人となるのである。

1 「○○話」、「○○論」、「○○説」、「○○学」、「○○科学」というふうには、何かについて真剣に語ったり論じたり、それ自体が学問になったりする場合に、その何かの後ろに接尾辞「-ology」を添えることが英語圏ではよくある。たとえば、エジプト(Egypt)についての研究は「エジプト学(Egyptology)」と呼ばれたりする。ドーナツ(doughnut)についての学問だから、「ドーナツ学(doughnutology)」というわけである。

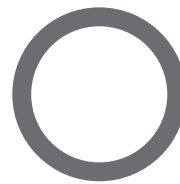
3 本書の楽しみ方

最後に、本書が提示するドーナツロジーの道筋を簡単に説明し、本書の楽しみ方の一つを提示してみたい。

まず、餅は餅屋、ドーナツはドーナツ屋ということで、実際にドーナツ屋を営んでいる松川寛紀・由実に、ドーナツ屋の実情（穴コラム2-1）とドーナツの作り方（穴コラム2-2）を開陳してもらった。さらには、松川夫妻の協力を得ながら、ドーナツというお菓子が世に流通し始めた頃の味を実際に再現してみる実証研究も実施し、「ドーナツの穴制作委員会」ディレクターの芝垣亮介がそれを報告している（第2穴）。

ドーナツの食品としての側面について知れば知るほど、だんだん欲が出てきて、ドーナツの穴はいつからあるのか、などという疑問をもつようになったりするかもしれない。私たちは、それをドーナツの歴史を紐解きながら明らかにしておきたいと考え、この探求を、英国史の研究者である大澤広晃にお任せした（第1穴）。その一方で、東洋におけるドーナツとその穴について考える手がかりを求めて、中国史を専門とする宮原佳昭に、中国とドーナツの関係に関わるコラム（穴コラム1）を執筆してもらっている。ドーナツをめぐる歴史的事実が明らかにされると、ようやく、そこから派生する問題を捉えていくことが可能になるだろう。たとえば、経済学者の後藤剛史は、ドーナツの穴の経済的な価値について探求し（第3穴）、私、奥田太郎は哲学者として、ドーナツの形に隠された壮大な秘密に触れようと試みている（穴コラム0）。

さらに、ドーナツの形をしたものの穴全般へと探求対象は及んでいく。たとえば、上記の中国史研究者である宮原は、中国における穴の文化的な様相を明らかにしようと試み（穴コラム5）、他方、宗教哲学研究と同時並行で物質文化論研究を進める佐藤啓介は、穴のもつ物質としての論理を解明して、世界の成り立ちに思いを馳せる視点を提供している（第4穴）。工学者の坂本登は、宇宙空間に実在する「穴」について、天体観測ミッションとの関連



で論じ（穴コラム4）、数学者の佐々木克巳は、英国の文学作品『不思議の国のアリス』のなかに潜む、穴をめぐる論理的なパズルの存在を指摘する（穴コラム6）。コミュニケーションを研究する今井達也は、人間同士が会話をするときの座り位置という観点から、コミュニケーションと穴の密接な関係を鮮やかに解き明かす（第5穴）。経営倫理の研究者でありながら競馬愛好家でもある高田一樹には、競馬における「穴」について、競馬の歴史に隠された「穴掘り」の伝統とともに、語り尽くしてもらっている（穴コラム3）。

こうして、「失われた」ドーナツの穴の）内堀と外堀を埋めたところで、いよいよ本丸である。ドーナツの穴について、論理、言語、存在という観点から、抽象度の高い、掘り下げた議論が展開されることになる。数学者の佐々木克巳は、ドーナツの穴を数学的に定義しようと試み（第6穴）、言語学者の芝垣亮介は、ドーナツと穴の関係について言語学的に徹底的に解明しようと試みる（第7穴、穴コラム7-1、穴コラム7-2）。私、奥田太郎は、「ドーナツの穴制作委員会」最高顧問を務める哲学者、加地大介の《穴の哲学》に依拠しながら、ドーナツの穴の存在論を展開する（第8穴）。

もちろん、ドーナツロジーの裾野は広く、これらの探求に尽きるものではない。ドーナツロジーは今ここに始まったばかりである。本書を熟読していただいた後は、みなさん自身がドーナツロジーの開拓者として、新たな探求の旅に出かけてほしい。そして、さらなる前人未到の知的光景を私たちに見せてもらいたい。本書は、その意味では、みなさんとの共同研究呼びかけの書と言ってもよいかもしれない。

Sample

あとかき

私をはじめでドーナツの穴に興味を持ったのは約2年前のことだった。いつも通りの好奇心に加えちょっとした嗅覚が働いたのだろう、それは（モノこそないが）しっかりと私の心に引っかかった。気になった矢先に何となく話をしてみたのが哲学者の奥田さんだった。ここでつれない反応をされていたら、おそらく本書は今ここに存在していなかったであろう。二十歳を過ぎた頃には「思い立ったが吉日オトコ」なんていうあまり嬉しくない通り名もあった私は、その名の通り、奥田さんに相談した1週間後には、ドーナツの穴をテーマとした一回きりの特別講義を開講していた。大学生、社会人、教員を合わせ、約40名の前で披露したのだが、ここで確かな手応えを感じ、この企画がものになる予感を得た。2016年4月から15週間にわたる、ドーナツの穴の授業も行なった。90分×15回の全てをドーナツの穴に捧げた授業だ。予定調和は一切なく、私と奥田さんと学生の3者でその場その場を乗り越えて行くスタイルであり、楽しくも痺れるような緊張感があった。奥田さんの言葉を借りると、この授業には「何かが生まれるかもしれない」という雰囲気があったのだ。

並行して、私と奥田さんは本書の執筆メンバーの選定も行ってた。この作業は学問の選定でもあったのだが、概ね順調に進んだ記憶がある。最初は各教員の研究室を訪れ、その後は彼ら呼び出し、その都度研究資料として

ドーナツを与え（そう、見方によっては一種の餌付けまがいではあったのだが）、多様な領域の研究者たちを自分の陣営に引き込んでいく作業は、まるで桃太郎が猿やキジを仲間にしていく過程のようでとても楽しかったのを覚えている。この点において心残りといえば、法学が落ちてしまったことだ。私の中ではドーナツの穴の法学的研究、名付けて「その穴、法で縛れますか？」のストーリーの青写真もあったのだが、残念ながら諸事情により本書に載るには至らなかった。とにもかくにも、本書はこうした経緯を通し、約2年の歳月をかけて制作されたのである。

さて、ここまで読んでくださったならお分かりいただけたと思うのだが、本書の目的は、ドーナツの穴の正体を世に伝えること、その過程を通してみなさまに学問を楽しんでもらうということの2点であった。「いい大人が、こんなバカげたことに本気で取り組んでここまでやっちゃうなんて、ほんとにバカ！」って、笑って感心してくれたらそれで十分という想いでやってきた。だって、我々の関心は、どれだけ早く走れるかよりも、どれだけ遠くまで行けるかだったのだから。実際、こうして本書の「あとがき」を書きながら、当初思っていたよりも遠くまで行けたように感じているし、執筆者全員が存分に楽しんできたように感じている。だが今振り返って思うのは、誰よりも楽しみ、学んでしまったのは他でもない私自身だったということだ。各執筆者と何度も行なったドーナツミーティングでは、専門外の学問を体験しただけでなく、彼らとの雑談や、何気ない一言に幾度も驚かされ刺激を受けた。「ああ、ドーナツの穴制作委員会って、知の宝石箱なんだ」と。私はこの2年間、ありとあらゆる種類のきらびやかな宝石を取っ替え引っ替え身につけては着飾っていたわけなのだ。楽しかったはずである。これこそ、まさに学問の醍

醐味だ。

学問、こと文系の学問が、過去の偉人の言葉を辿るだけの、カビの生えた、小難しい、時に意味のない代物だと思われるようになったのはいつごろからなのだろうか。ご存知の通り、近年の学問に対する風当たりにはなかなか厳しいものがある。学問ってもっと楽しいものなのに。そんな我々の想いが読者のみなさまに伝わってればいいなと思う。

学問は、自分たち人間とは何者かを探求し、今を理解し、これからの進むべき道を模索するものだと私は思う。失われたドーナツの穴を求めた旅は一旦ここで終了するが、今、私にはある光景が見えている。それはここまで来てふっと眼前に現れた光景である。本音を言うと少し疲れてもきたのだが、気づけば私はまた新たなスタート地点に立っているようなのだ。ここからは私の一人旅になると思うのだが、またどこかで新たな猿やキジが見つかるかもしれない。そんな出会いにも期待をしながらもう少し、ドーナツロジーという名の道無き道を進んでいこうと思っている。

ドーナツの穴制作委員会ディレクター 芝垣亮介



ドーナツの穴制作委員会 メンバー紹介

①専門 ②現職 ③最終学歴

◎ディレクター

芝垣亮介(しばがき・りょうすけ)

- ①言語学: 語彙意味論・統語論
- ②南山大学外国語学部英米学科准教授
- ③ロンドン大学東洋アフリカ学院大学院言語学専攻博士課程修了 博士(言語学)

◎プロデューサー

奥田太郎(おくだ・たろう)

- ①哲学: 倫理学・応用倫理学
- ②南山大学人文学部人類文化学科教授
- ③京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻博士後期課程研究指導認定退学 博士(文学)

◎リサーチフェロー

今井達也(いまい・たつや)

- ①コミュニケーション学: 対人コミュニケーション
- ②南山大学外国語学部英米学科講師
- ③テキサス大学オースチン校大学院コミュニケーション学専攻博士課程修了 博士(コミュニケーション学)

大澤広晃(おおさわ・ひろあき)

- ①歴史学: 近現代イギリス史、イギリス帝国史
- ②南山大学外国語学部英米学科講師
- ③ロンドン大学キングズコレッジ大学院歴史学研究科博士課程修了 博士(歴史学)

後藤剛史(ごとう・たけし)

- ①経済学: 応用ミクロ経済学
- ②南山大学経営学部経営学科准教授
- ③九州大学大学院経済学研究科経済工学専攻博士後期課程修了 博士(経済学)

坂本 登(さかもと・のぼる)

- ①工学: 制御工学、制御理論、航空宇宙システム
- ②南山大学理工学部機械電子制御工学教授
- ③名古屋大学大学院工学研究科宇宙工学専攻博士後期課程修了 博士(工学)

佐々木克巳(ささき・かつみ)

- ①数学: 数理論理学
- ②南山大学理工学部ソフトウェア工学科教授
- ③東京理科大学大学院理工学研究科情報科学専攻博士後期課程退学 博士(数学:阿姆斯特ダム大学)

佐藤啓介(さとう・けいすけ)

- ①物質文化論および宗教哲学: 近現代キリスト教思想、現代フランス哲学
- ②南山大学人文学部キリスト教学科准教授
- ③京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻博士後期課程研究指導認定退学 博士(文学)

高田一樹(たかだ・かずき)

- ①経営倫理学: 企業の社会的責任論
- ②南山大学経営学部経営学科准教授
- ③立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了 博士(学術)

松川寛紀(まつかわ・ひろのり)

- ①ドーナツデザイン、イラスト
- ②HUGSY DOUGHNUT 経営者
- ③東京農業大学応用生物科学部栄養科学科管理栄養士専攻卒業 学士

松川由実(まつかわ・ゆみ)

- ①ドーナツ作り
- ②HUGSY DOUGHNUT 経営者
- ③関東学院大学人間環境学部健康栄養学科卒業 学士

宮原佳昭(みやはら・よしあき)

- ①歴史学: 中国近代教育史
- ②南山大学外国語学部アジア学科准教授
- ③京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻博士後期課程研究指導認定退学 博士(文学)

〈最高顧問〉

加地大介(かち・だいすけ)

- ①哲学: 分析形而上学・哲学的論理学
- ②埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授
- ③東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士過程単位取得退学 文学修士



失われたドーナツの穴を求めて

2017年7月4日 第1刷発行

編者 芝垣亮介・奥田太郎

発行所 さいはて社

<http://saihatesha.com/>

E-mail: info@saihatesha.com

Tel: 050-1481-9406

Fax: 020-4668-7526

発行者 大隅直人・正岡加代子

装幀 HON DESIGN (北尾崇・会退由希恵・小守いつみ)

印刷 共同印刷工業

製本 藤原製本

Copyright © 2017 by Ryosuke Shibagaki, Taro Okuda

Printed in Japan

ISBN 978-4-9909566-0-8

ISBN978-4-9909566-0-8

C0000 ¥1800E

定価 本体1,800円 +税

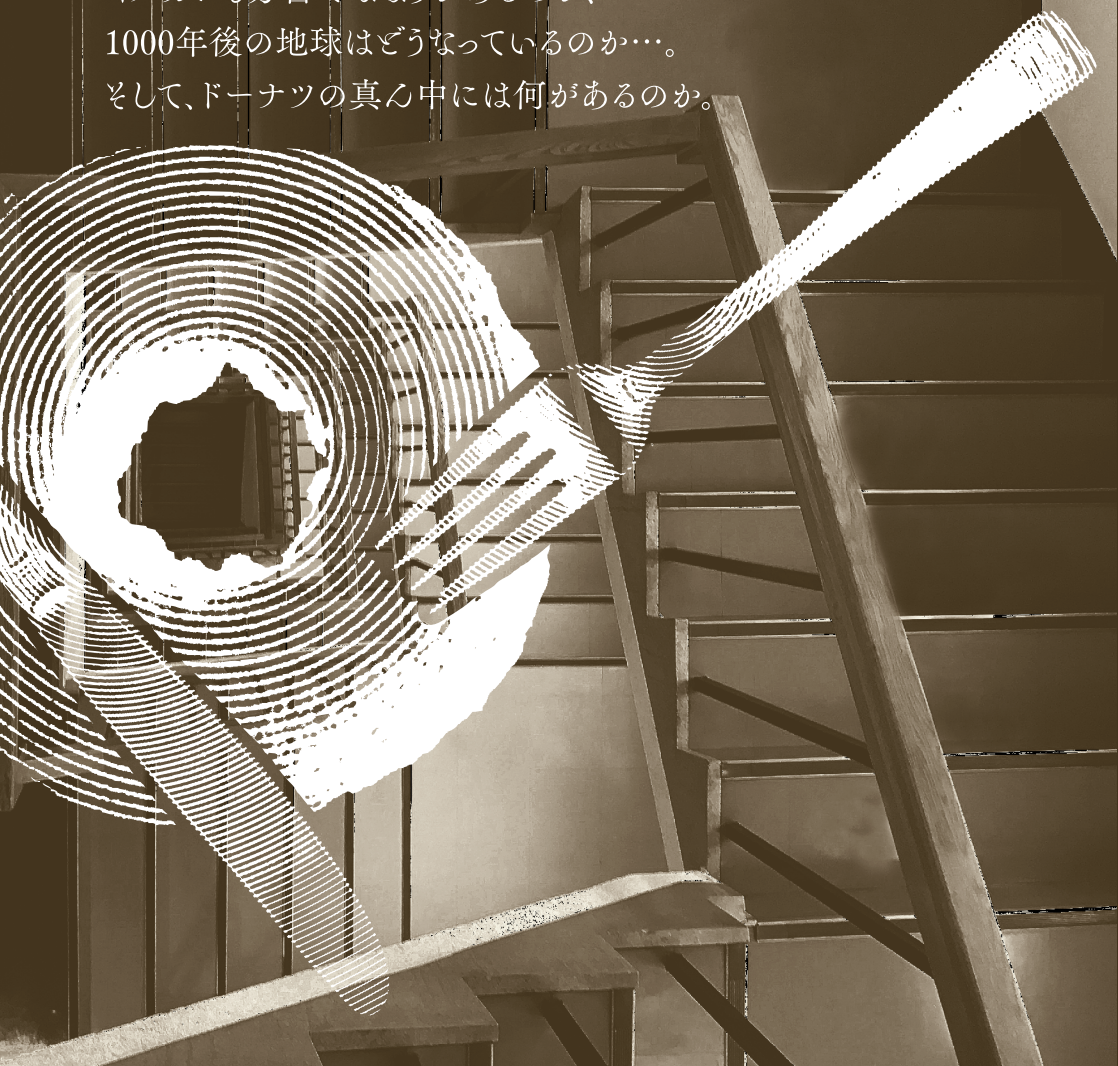


9784990956608



1920000018005

人はなぜ恋をするのか、
イルカにも方言やなまりがあるのか、
1000年後の地球はどうなっているのか…。
そして、ドーナツの真ん中には何があるのか。





Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. saveaswwf.com

This is a WWF document and cannot be printed!

The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. saveaswwf.com

Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. saveaswwf.com

Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. saveaswwf.com



SAVE AS WWF, SAVE A TREE